フェローシップ・ニュース
№136

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域
アディクション研究所

発行日
2026年5月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所（Asia-Pacific Addiction Research Institute）の略称です。

全国のDARCやMAC等の社会復帰施設、福祉・教育・医療・司法機関と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

―近藤恒夫を追い続けて―

ドキュメンタリー映画制作インタビュー

来春公開を目標に、ダルク創設者である 故・近藤恒夫のドキュメンタリー映画が制作されています。約20年にわたり近藤とダルクを撮り続けてきた映像ディレクターの中沢一郎氏に映画に込めた思いをじっくり伺いました。

ソーシャルワーカー　志立 玲子

――今回の映画について、改めてどのような作品になるのか教えてください。

中沢：近藤さんを中心に、ダルクと薬物依存の現実を、入寮者も含めて長い時間をかけて記録してきました。2004年から撮っているので、ほぼ20年分の積み重ねです。

法律とか制度ではなくて、「人」を中心にした作品にしたいと思っています。最初にダルクに来たとき、ミーティングでみんなが自分のことを語っているのを見て、本当に驚いたんです。こんなに自分自身と向き合って、正直に話している。その姿がすごいなと思って。その一人ひとりの人生を描きたいと思いました。

――当初はテレビ作品として考えていたそうですね。

中沢：そうなんです。最初はテレビドキュメンタリーを作ろうと思っていて、1年くらいでまとめるつもりでした。近藤さんに「きれいごとじゃないものにしてくれ」と言われて。この言葉が印象的でした。

いわゆる感動的な話とか、ハッピーエンドとか、そういうものじゃなくて、「現実はそんなに甘くない」ということをちゃんと見せてほしい、と。見た人が場合によっては腹が立つくらいのものでもいい、と言われました。薬物はまだ「ダメ。ゼッタイ。」が主流ですし、世間って、「いい活動だとは思うけど、うちの近くには来てほしくない」という感覚があるじゃないですか。その違和感も含めて、ちゃんと見せたいという話をしていました。

目次：

近藤恒夫を追い続けてドキュメンタリー映画制作インタビュー・・・志立	1
コラム　心のつぶやき日記(17)・・・野呂岳央	4
支援につなげる弁護術(34)・・・髙橋洋平 合同お花見 in 新宿御苑・・・キョウ	5
AREA軽井沢の入寮者からのメッセージ・・・ココ	6
AREA軽井沢より・・・針木小太郎 BASEより・・・市川元太	7
司法サポートのご案内 家族教室スケジュール	8

――近藤さんとの出会いについて教えてください。

中沢：出版社の方の紹介で、東上野に会いに行ったのが最初です。最初に会ったとき、「あ、この人だ」と思いました。すでにテレビや雑誌で見ていた人でもありましたし、実際に会ってみて強く惹かれるものがありました。

そこから撮影が始まったんですが、途中で何度も中断したり、また再開したりを繰り返しています。それでも近藤さんとはずっと会い続けていました。撮影しなくても、ご飯を食べたり話をしたり、関係は続いていました。

結果的に、2004年から2022年、近藤さんが亡くなるまでの時間を一緒に過ごしていたことになります。

――長い年月の中で印象に残っている出来事はありますか。

中沢：たくさんありますが、ある日のことが印象に残っています。朝、近藤さんのところに行って「今日は東上野のダルクを撮影しよう」と思っていたら、「仙台に行くか」と言われて、そのまま一緒に行くことになったんです。

その道中で、薬物依存症はみんな回復しますか？と聞くと、「全員は救えない」と言われました。「そりゃ、全員が良くなることを願っているけど、そんな簡単ではない」、実際に現場では人が亡くなることもあるし、再発する人もいる。そういう現実について、「意味があると思わないとやっていられない」と話していました。その日は仙台でツトムさん（仙台ダルクの施設長）のバースデーの集まりに参加したのですが、その一方で、長野ダルクの施設長から今日、入寮者が亡くなったという知らせもありました。祝う場と、死の現実が同時にある。そのことがとても象徴的でした。

近藤さんは、「人はどんどん死んでいく」とも言っていました。葬式が続くこともある、「結婚式と葬式が同じ日にあることもあった」。そういう現実の中で活動していたんだと思います。亡くなっていく仲間からもメッセージがあるとも。「自分たちも、これ以上クスリを使い続けると、死に近づいてしまう。ダルクをやっているとそういうことを身を持って感じる。」仙台から帰りの新幹線の中で、そう語っていました。

――撮影を通して見えてきた「現実」とは何でしょうか。

中沢：やっぱり「死」が身近にあることです。ダルクの中でも亡くなる人はいますし、外にいればもっと危険な状況になる。施設につながらない人の方が、もっと亡くなっていると思います。そういう意味で、ダルクは「安全な場所」でもあるんですよね。最初に近藤さんが言っていた「きれいごとじゃない」というのは、こういう現実も含めてのことだと思います。

――他の施設での撮影もあったのでしょうか。

中沢：主に日本ダルクが中心ですが、茨城の施設や女性の施設にも行きました。最初の頃ですね。茨城の施設に行ったときも、ちょうどお葬式をしていて。外から撮影しながら、「こんなに人が亡くなるんだ」と強く感じたのを覚えています。

――撮影の中での苦労についても教えてください。

中沢：人の入れ替わりが多いことですね。入寮者はどんどん変わっていくし、その後どうなったのか追えないこともある。再発したり、亡くなったり、入院したり…。

撮影する側としての距離感も難しいです。近藤さんや利用者の方々に対して、どう関わるかは常に考えていました。

――印象に残っている近藤さんの姿はありますか。

中沢：たくさんありますね。いい意味で「いい加減」なところが魅力でした（笑）。でも実はものすごく人を見ているんです。本当に細かいところまで見ている。

一方で、細かく管理しすぎない。以前は管理しようとしていた時期もあったそうですが、途中で「無理だ」と思って手放したと聞いたことがあります。それが結果的にダルクの広がりにつながったのかもしれません。ある意味での大胆さと柔軟さがあったと思います。

印象的なのは、講演に向かう車の中で雑談で話したことをそのまま壇上で話してしまうような大胆さもあったことです（笑）。でもそれがまた、人を惹きつける魅力でもありました。

左が中沢一郎氏
右がインタビュアー
志立玲子

左がマーシー
右が中沢氏
YouTube「MARCY'S
ちゃんねる 」でも宣伝
してもらいました。

――最後にどのような言葉を残されましたか。
中沢：近藤さんがガンで動けなくなってからも撮影は続けさせてもらいました。
ベッドの上で「ダルクで救われたのは誰かなって思ったら、やっぱり俺だなあ。ダルクがあって救われたのは俺だなあと思うよ。」「楽しかったからやってこれた。楽しくなかったら続かないから。楽しかったんだよ」と、笑顔で語っていました。
　僕も近藤さんやダルクの撮影が楽しかったから続けてきました。

――現在、クラウドファンディングも行っていると伺いました。状況はいかがですか。
中沢：今、資金集めのためにクラウドファンディングを行っています。現時点で200万円を少し超えたところです。（※4月20日14時現在です。）クラウドファンディングは最初の動きが大事で、「スタートダッシュ」が重要だと言われていますが、その難しさも実感しています。目標は500万円ですが、これは正直ギリギリのラインです。本当はもっと必要で、できれば800万円くらいは集めたいところです。

――追加の目標も設定されているそうですね。
中沢：はい。第2ゴールが600万円で、英語字幕制作や上映用データ（DCP）の制作費、赤字補填に充てる予定です。第3ゴールの700万円では、海外映画祭への出品費用や参加費を考えています。依存症の問題は世界共通なので、海外でも上映したいと思っています。

フィリピンではJICAのプロジェクトでミーティング会場を増やす活動をしました。

――海外展開も視野に入れているのですね。
中沢：はい。依存症の問題は日本だけでなく、世界共通のものですから。海外でも見てもらいたいと思っています。実際に近藤さんたちとフィリピンに行った経験もありますし、伝わるテーマだと思っています。

――映画はどのような方に見てもらいたいですか。
中沢：特定の層に向けた「教育映画」にするつもりはありません。まずは普通に見て面白いこと。そして、何か強く心に刺さること。依存症の当事者や支援者だけでなく、むしろ一般の人に見てほしいですね。多くの人が知らない世界だと思うので。ダルクの人たちは、自分と向き合いながら、人生をやり直そうとしています。そんな生き方があるということを知ってもらえたらと思います。

――社会へのメッセージとして伝えたいことはありますか。
中沢：近藤さんは「自分たちはモンスターじゃない」と言っていた。薬物依存症を20年以上取り続けて本当にそう思います。かつて、「覚せい剤やめますか？それとも人間やめますか？」というテレビCMが流れていたこの国では、今でも漫画やテレビドラマなどでは、薬物依存症というと、危険な犯罪者のように扱われている。世間ではどうしてもそのような偏見があります。やり直そうとしている人たちにはその権利があるはずです。それが当たり前のこととして伝わっていけばいいなと思っています。そういった偏見が少しでもなくなればいいと思っています。

――最後に、公開予定について教えてください。
中沢：公開は来年2月27日を目標にしています。近藤さんの命日でもあります。その日が土曜日なので、ちょうど映画の公開日になります。最初は都内のミニシアターでの上映を予定しています。今後、できるだけ多くの場所（全国）で上映していきたいと考えています。

20年という時間の中で積み重ねられた記録と関係性。その中から紡がれるこの作品は、「回復」と「生き直し」をめぐる現実を、私たちに静かに、そして力強く問いかけてきます。公開の日を心待ちにするとともに、クラウドファンディングへのご支援にもご協力いただければ幸いです。

作田明賞の受賞式会場にて

近藤さん73歳のお誕生日会にて

クラウドファンディングのお申し込みは右のQRコードから　⇒

就労継続支援B型事業所Will

就労継続支援B型
事業所 Will

新規利用者
新規作業
大々的に募集中!!

TEL:03-5925-8874

押し花を使った栞の試作品です。

これから販売予定です。

実習生に作業の体験をしてもらいました。

Willのコラム

心のつぶやき日記（17）

施設長　野呂 岳央（タケ）

4月28日、東京女子医科大学看護学部4年生のお二人が、Willの実習に来てくださいました。冒頭のオリエンテーション、仲間の体験談、最後の振り返りには、学部の先生にも同席いただきました。日中は、当事業所で仲間の体験談や作業体験、午後は近所のＡＡミーティングに行くプログラムでした。

今回の実習で学生の皆さんに体験していただきたかったのは、依存症の当事者が社会の中でどのように生活しているのか、そしてWillや自助グループのような場所がどのように機能しているのか、ということです。「治療」や「指導」の場として見るのとは少し違う角度から、現場や社会資源をそのまま見ていただきたかったのです。

私たち依存症者には、本当にいろいろな依存対象があります。アルコール、薬物、ギャンブル、買い物、性、人間関係。そしてやっかいなことに、依存対象はスライドしていきます。一つを止めても、気がつけば別のものに手が伸びている。
知識としてはわかっていても、やめなきゃいけないとわかっていても、「わかっていてもやめられない」
それに、「自分だけじゃ自分のことはわからない」「自分だけじゃ自分のことはケアできない」
こうした感覚は、依存症者の中心にあるものだと、私は経験から思います。

ただ、ここで率直にお伝えしておきたいことがあります。依存対象は、私たちにとってただの「悪いもの」ではなかった、ということです。
アルコールがあったから、薬があったから、ギャンブルがあったから、本当に苦しい時期を乗り切れた。仲間の体験談を聞いていても、これは何度も耳にすることです。依存には「自己治療」と「自己破壊」の両面がある。不健康な依存対象には、それくらい強い力があるのです。

だから、やめれば全部解決する、というほど話は単純ではありません。

アルコールや薬やギャンブルを止められても、そのままだと、心の中の埋まらない部分は、また別のもので埋めるしかなくなります。仕事、家族、恋愛、ネット、買い物。気づけば形を変えて、同じパターンを繰り返している。そして、依存対象を取り上げただけだと、これまで覆い隠されていた生きづらさが、生のまま表面に出てきます。本当に苦しいのは、ここからなのかもしれません。

ではどうするか、ということですが、「より健康な依存への置き換え」ということになるのかも。それは、たとえば、仲間とのつながりであり、安心できる居場所。一人で抱えこまずに誰かに話す。今日も誰かと顔を合わせる。立派なことでも特別なことでもなく、ごく素朴な日常の積み重ねです。それを続けていけることが、とても大事なことのように感じています。

Willという場所が、そうした「置き換え」のひとつの形になっていけるように。いろいろなことが起こるし、普段もよく揺れてはいますが、今日もメンバーが来て、明日もまた来る、顔を合わせて作業をする、それが続いている。それだけで十分意味のある場所なのかもしれません。

学生さんのお二人にとって、今回の実習がどんなふうに残ったでしょうか。普段出会えない景色を、少しでも持ち帰ってもらえていたら嬉しいです。

実習生2名　記念撮影しました。

コラム

支援につなげる弁護術（34）

理事・嘱託研究員・弁護士 髙橋 洋平

最近、薬物事案で初犯の方を担当しました。この方は、起訴前の段階で検察官からプログラムを受けた方がよいと提案され、快諾しました。

その後、弁護人である私のもとに、麻薬取締部が実施する薬物の再乱用防止の支援制度に関する通知書が届きました。マスコミ報道によると、この制度は再乱用対策に有効であるため、全国的に実施されることになったとのことです。対象は、保護観察が付かない執行猶予者などです。

確かに、初犯の段階で積極的に支援につなげることは有意義だと思います。しかし、麻薬取締部は厚生労働省の捜査機関、いわゆる「マトリ」です。なぜ捜査機関が支援の実施主体になるのか。しかも、これを全国展開していくというのですから、疑問を感じます。

私が担当する方も、検察官の提案を特に断る理由もなく、よい制度だと理解して快諾しました。それくらい、もう二度と薬物に手を出さないという決意は本物だと思います。ただ、彼に依存症の病理があるとしたらどうなるのか、気になるところです。たとえよい制度でも、再犯者を製造するようでは意味がありません。また、言うまでもありませんが、捜査機関の情報収集のための制度であってはなりません。

大切なことは、本人が自ら回復の道を歩めるかどうかです。麻薬取締部の支援制度がその一つになるかもしれませんが、もしうまくいかなくても、他の支援にたどり着いてほしいです。本人が主体的にプログラムに参加し、自らの意思で回復への一歩を踏み出すことが、真の回復への鍵になるはずです。

アパリ・Will・BASE 合同 お花見 in 新宿御苑

先日4月2日にAPARI、Will、BASEの合同で新宿御苑にてお花見を行いました。生まれも育ちも東北地方の私にとって、新宿御苑の広大さに圧倒されたとともに快晴のもと、桜の木の美しさを感じることができました。また、各施設の利用者が自作した昼食を持ち寄り仲間と共に食事をしたことで、普段交流の少ない仲間との交流を図ることができ、より良い時間を過ごせたなと感じます。

Will非常勤スタッフ　キョウ

お花見日和の新宿御苑を散策

AREA軽井沢の入寮者からのメッセージをお届けします！

AREA軽井沢　入寮者からのメッセージ

「過去と向き合う」

ココ

ギャンブル依存症のココです。広島県出身、昭和61年生まれで今年40歳になります。わたしがギャンブルと出会ったのは16歳の頃です。

思い返せば、何不自由ない環境で、親の愛を受けて育ってきました。でも当時の私は親の言う事を素直に聞けず、思い通りにいかなかったらすぐに逃げる、ちゃんと考えず自由になりたい！というバカな夢をかかげて、自分の力で何とかなると思っていました。

友人がスロットで勝って、お金を手にしているのを見て興味を持ち、やってみるとビギナーズラックで勝ててしまった事からギャンブル人生がスタートしました。当時は勝つ事も多く、ハマるのに時間はかかりませんでした。

両親からは、お金のことはきびしく言われていました。人からお金は借りるな、借金だけはするなと。そんな事するわけないと思っていた自分が、気付けばクレジットカードの現金化や、キャッシング枠、給料の前借り、友人知人に借りる、ウソをついてまで2社3社と申し込みをしていつの間にか総量規制いっぱいまで借りていました。

返済に追われながらの生活、仕事のストレス、満たされない気持ちからギャンブルに逃げてばかりでした。そんな生活を続けながら、29歳の頃できちゃった結婚をするんですが、妻には借金の事は言えず、ウソをつきながら暮らしていました。幸せな時間もたくさんありました。家族を守っていかないと、と思いました。でもそのウラで、早く借金をどうにかしないと、お金を増やすにはギャンブルしかない…という気持ちにとらわれて、ギャンブルは全く止まりませんでした。

当時、バーで働いていた私は、店の売り上げもギャンブルに使ってしまう事も増え、次第に支払いや、住んでいたアパートの家賃も払えなくなり、強制退去になってしまい、どうする事もできず実家に帰る事になりました。自己破産をするのですが、お金の囚われが消える事はなく、再びギャンブルに手を出してしまい、家庭内窃盗をしては給料を使い込んだりバレるようなウソを繰りかえし、両親や妻を苦しめ悲しませ泣かせてばかりでした。

信用、信頼も底をつき、妻に離婚という言葉を言わせてしまうまで自分を変えられませんでした。そんな事になっていても、家族に病気だと言われても、自分が依存症だという事は全く認められませんでした。闇金にも手を出すようになりギャンブルを続けているうちに底をつき家族や家族会、当事者支援部の方のおかげで東京の依存症回復施設に入所するんですが、まだどこか有力な考え方をしていた私はルール違反ばかりして、それがバレないようにと生きづらい暮らしをしている中で再びギャンブル。ルール違反がバレそうになると自主退寮と逃げてしまいました。

施設を出てからは、仕事も決まり順調に暮らしている事で、自分が依存症だという事、向き合わないといけない事を棚上げして、もう大丈夫、少しくらいならとギャンブルをしてしまいます。だんだんと負けが増えてきた時に、少しだけ、あとで返すからという気持ちで会社の金庫のお金に手をつけてしまいました。使い込んでしまい、どうにもならなくなるまで全く止める事ができず、焦り、不安、恐怖がおそってくる毎日。死にたいと思いました。そんな時に元妻と話をして事情を説明すると、ちゃんと自首をして罪をつぐなってきて、と言われ驚きました。呆れられて、もう見捨てられると思っていたのに、また連絡をとったりしたいと思っていると言われ、泣きました。

エイサー練習の様子
2月から施設プログラムとして始まりました。
5月のイベント披露に向けて日々奮闘中です。

農業ボランティア
近所の農家さんでの清掃ボランティアの様子です。

仲間のリアルバースデーの様子

こんな事になるまで家族や妻、子供達、周りの人の大切さに気付かなかった事を本当に後悔しました。あの時ギャンブルなんてしなければ、と。

それから、自首をして逮捕され、裁判が終わり今の施設につながっています。迷惑をかけた人達、両親や元妻、子供達の事ばかり考えて辛い時もあります。ここでは書ききれない事や思いもたくさんありますが、今は同じ依存症の仲間達と過ごし、いろいろ気付かされます。前の施設ではできなかった事や、過去と向き合う事、これからの事をきちんと考えて回復を続け二度とギャンブルをしない生き方をしていきたいです。

AREA軽井沢 開設1周年フォーラムのご案内

AREA軽井沢 施設長　針木 小太郎

皆様からのご支援・ご声援を受け、おかげさまで開設より1年を迎える運びとなりました。その感謝を込めて、開設1周年フォーラムを開催いたします。

AREA軽井沢 開設1周年フォーラム
『Change.　だから私たちはここにいる。』
日時：2026年5月20日(水)　12:30開場　13:00～17:00
場所：“@長野原”長野原町住民総合センター　大ホール
群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1

※お申込みは右のQRコードよりお願いします。
詳細は(https://area-karuizawa.com)に情報を掲載しております。
皆様のご来場を心からお待ちしております！

⇒

BASE ON TOKYO　活動記録

BASE 施設長　市川 元太

2026年1月5日の開所から約4か月が過ぎました。今回もBASEの日々の様子をご覧ください。BASEではミーティング以外にも様々なアクティビティを行っています。

皆で楽しく餃子作り
美味しかったです！

しながわ水族館も行きました！

スポーツプログラム
ボルダリングに
挑戦！

カレー作りもしました

パズルを完成させて
壁に飾ります

北軽井沢フェロー
草津温泉にて

BASE　自立訓練(生活訓練)事業所
TEL:03-6276-8575
住所:東京都渋谷区本町1-16-17 保ビル

藤岡ダルク
20周年フォーラム
開催決定！

日時:2026年11月7日(土)
会場:藤岡市みかぼみらい館
大ホール

詳細は決まり次第ご報告いたします。

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

〇アパリ東京本部
〒162-0055
東京都新宿区余丁町14-4
AICﾋﾞﾙ１階
電話：03-5925-8848
FAX　：03-5925-8984
Email：info@apari.or.jp

〇藤岡ダルク
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX　：0274-28-0313
〇入寮費：月額13万円+生活費1日千円（初月のみ14.5万円）（税別）
＊生活保護の方も可能
〇入寮条件：依存症から回復及び自立をしようとしている本人。男性のみ。
〇入寮期間：個人により差があります。
https://fujiokadarc.com/

2019年7月よりホームページが新しくなりました。ぜひご覧ください。
https://apari.or.jp
https://www.facebook.com/AsiaPacificAddictionResearchInstitute/

発行責任者：志立玲子
2026年5月1日発行
定価　１部　100円

＜司法サポートのご案内＞

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかなかった日本において、**初めて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みを2000年7月からしています。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。

保釈中のプログラムの提供、受刑中の身元引受、出所出迎えをしてリハビリ施設につなげるまでをコーディネートします。

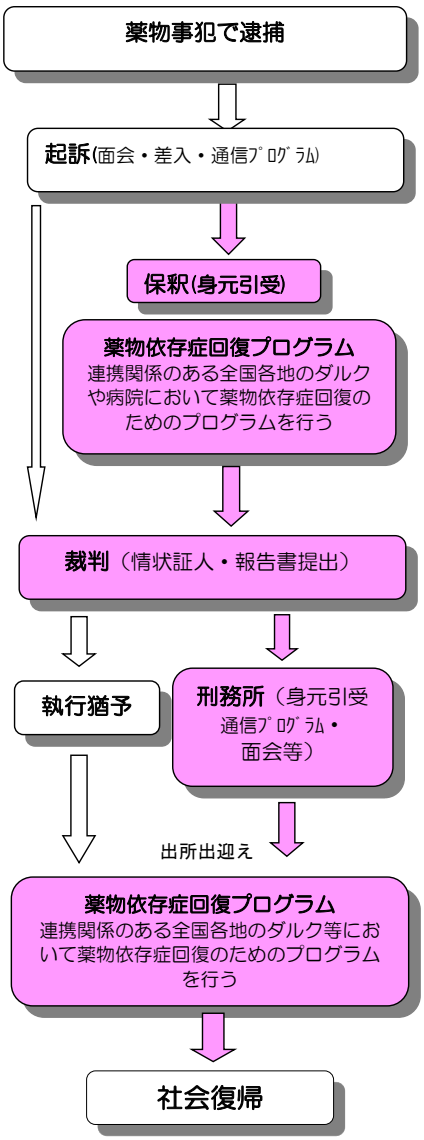
ギャンブルの問題が原因で逮捕された方の司法サポートも行っています。

[料金：コーディネート費用として20万円(税別)。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

窃盗、横領、詐欺等で逮捕されたご家族のご相談もお受けしています。

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



＜アパリ家族教室スケジュール・東京＞

第1月曜	連続講座	土曜	嗜癖行動家族教室
5/11(月) 13:30～	第1回 薬物依存症によるダメージと回復	5/9(土) 17:00～	第4回（新） 家族の歴史～世代伝播とは～
6/1(月) 13:30～	第2回 薬物の欲求と「きっかけ」「危険な状況」への対処について	6/13(土) 17:00～	第5回（新） 依存症と家族 ～共依存やイネイブリング～
7/6(月) 13:30～	第3回 薬物依存症者の心にある 2つの考え	7/11(土) 17:00～	第6回（新） 発達障がいと家族 ～アスペルガーとカサンドラ～
8/3(月) 13:30～	第4回 本人・家族の心の成長- 自律心・自尊心を伸ばす関わり	8/8(土) 17:00～	第7回（新） 家族の回復とは

【対象】ご家族、支援者等（本人は参加できません）
どちらも全8回の講座ですが、どの回からでも参加できます。
【場所】アパリ東京本部　【参加費】3,000円（2名以上の場合は4,000円）
連続講座　講師：志立玲子（精神保健福祉士・公認心理師）
嗜癖行動　講師：梅野充（アパリクリニック精神科医師）、志立玲子